国宝に指定されている宇佐神宮本殿。八幡大神（応神天皇）を祀った一之殿、比売大神を祀った二之殿、神功皇后を祀った三之殿で構成される。M字形状の屋根は八幡造の特徴。金色に輝く樋は金銅樋。

銅のルーツを探して。

宇佐で出会った一大国家事業

ずいぶん前になるが、「銅直（どうちょく）」という姓の方が本誌に投稿していただいたことがあった。内容は「銅」姓の発祥をひもとくもので、そもそも「銅」姓は大分県の宇佐神宮が与えたものという。そして銅と宇佐神宮との関わりを調べてはどうかと結ばれていた。いただいた手がかりをもとに、今回、宇佐神宮へ真相を探りにいく機会を得た。

宇佐神宮とは全国に4万社あまりある八幡様の総本宮。歴史は非常に古く、八幡神が鎮座したのが欽明天皇の時代（539～571年）といわれ、本殿は奈良時代の725年に建立された。

歴史ある宇佐神宮へ案内していただいたのは宇佐市役所商工観光課の方々。宇佐神宮は広大な敷地に多くの社殿を持つ。特に本殿は八幡造と呼ばれ、檜皮葺（ひわだぶき）の屋根が優美なM字を描き、柱は朱漆塗り、随所に金銅樋が配置され、実に美しい。

これほど荘厳な建築物がはるか昔に建立されたとは驚きだ。宇佐神宮の権祢宜・須磨和啓氏に話をうかがった。

「建立にはかつてこの地で活躍した豪族が深く関わっています。豪族の中には朝鮮半島からの渡来人もおり、特に秦（はた）氏は有名です。渡来人は当時の最新技術を伝え、それがなければ建立は難しかったのではないでしょうか。伝わった技術のなかには銅の加工技術もありました」

宇佐は朝鮮半島との交通の中継点としての役割を担っていた場所である。銅加工技術も渡来人からもたらされたのだろう。ここで「銅直（どうちょく）」姓について聞いてみた。

「銅直（どうちょく）…ここでは同じ文字で、「どうべた」と読む姓の方がいます。職業を示す姓のようなので、たとえば鋳物師などの可能性が考えられます。当時、宇佐神宮が銅の加工技術を保有していたかは不明ですが、宇佐神宮の影響下にあった香春岳には採銅所がありました。奈良時代につくられた銅鏡も残っています」

実際に宇佐神宮宝物館には、奈良時代に地域の豪族より奉納された銅鏡が保管されている。同宝物館には国宝や重要文化財、大分県有形文化財がところ狭しと並ぶが、そこには「勅使奉納鏡」という銅鏡も並んでいる。この鏡は一体何だろうか。

「奈良時代、聖武天皇は大仏鋳造にあたって、宇佐神宮に使いを遣わし祈願しました。これに対し宇佐八幡神は託宣を下し、大仏鋳造を助成しました。その後、朝廷は重要な事柄を決める際は宇佐八幡神にうかがいをたてるようになり、勅使奉納鏡はこの使いによって奉納されたものです」

大仏鋳造（奈良・東大寺大仏）という国家の一大事業の成功に貢献した宇佐神宮はその名を知らしめ、発展を遂げたという。一説には銅加工技術があったからこそ朝廷は宇佐神宮にうかがいを立てたのではないかと指摘する人も少なくない。この地にもたらされた銅加工技術とそれを物語る証。数々のいにしえの手がかりは古代ロマンをかきたててやまない。

宇佐神宮へ案内いただいた宇佐市役所経済部商工観光課ツーリズム係吉武裕子係長と松田知典主事

勅使奉納鏡（奈良時代）
朝廷から宇佐神宮への奉納品

海獣葡萄鏡（奈良時代）
この地の豪族によって奉納された銅鏡

宇佐神宮の権祢宜・須磨和啓氏